

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。
■文中で旧 URL(<http://www.nougyou.kitakami.iwate.jp/agri/>) を記載している場合、新 URL(<http://i-agri.net>) に読み替えてください。

平成18年1月発行

病害虫防除技術情報 NO.17-3

岩手県病害虫防除所

近紫外線カットフィルムを使用した施設ピーマンでは定植時の殺虫剤の施用を省略できる

近紫外線カットフィルムをハウスの被覆材として使用した施設ピーマンでは、アザミウマ類、アブラムシ類の初期寄生が遅れるため、定植時の殺虫剤は不要であった。

1. 実証の目的

近紫外線カットフィルムを利用することによって、アザミウマ類やアブラムシ類の飛び込みを抑制し、害虫密度を低減する物理的防除法が確立された。そこで、現地実証を行い、被害の低減を図るとともに防除回数を削減して、より環境負荷の少ない栽培の資とする。

2. 実証結果

(1) 近紫外線カットフィルムを使用したハウスでのアザミウマ類、アブラムシ類の年間誘殺数の推移
粘着トラップを利用して、慣行ハウスと近紫外線カットフィルムを使用したハウス(以下UVカット区)の栽培期間中のアザミウマ類・アブラムシ類の誘殺数を調査した。

現地実証は3圃場で行い、病害虫の防除は慣行区、UVカット区とも同様に行った。

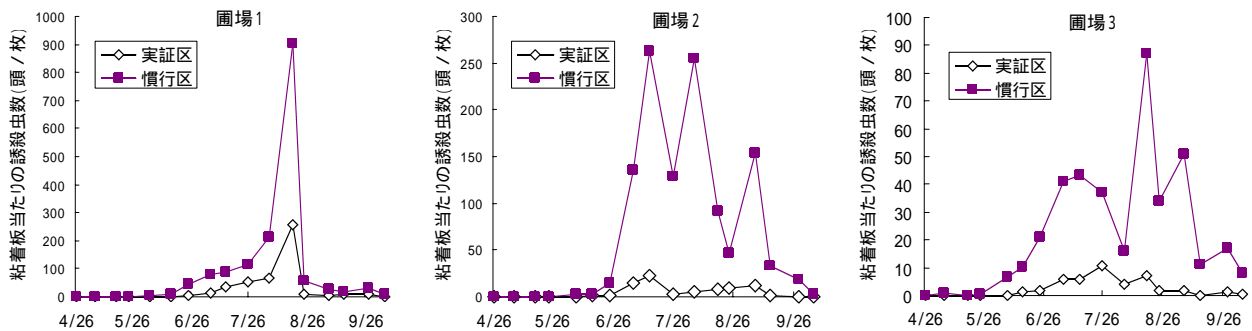


図1 アザミウマ類の誘殺数(H16)

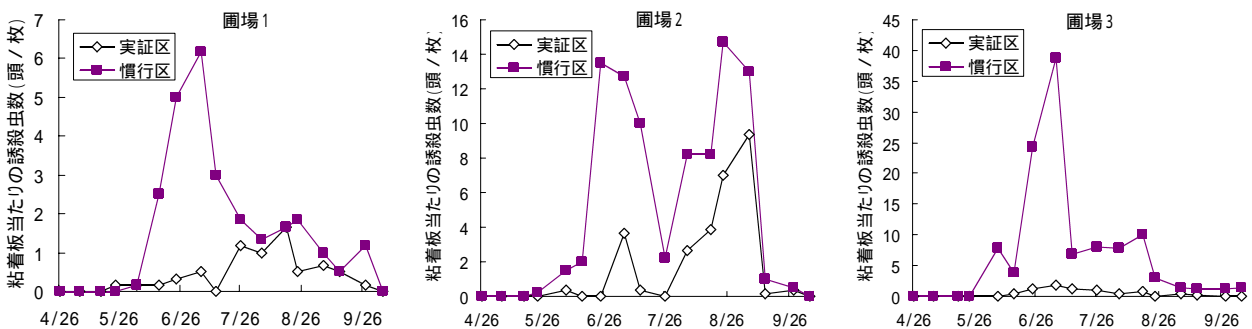


図2 アブラムシ類の誘殺数(H16)

粘着トラップを利用して栽培期間中のアザミウマ類・アブラムシ類の誘殺数を調査したところ、慣行区では6月上旬から誘殺数が増加したのに対して、UVカット区では6月下旬まで誘殺が少なく、慣行区と比較して飛来時期が遅かった。

また、UVカット区では慣行区と比較して、栽培期間を通して両害虫の誘殺数が少なかった(図1, 2)。

(2) 近紫外線カットフィルムを使用したハウスでの定植時の粒剤（殺虫剤）施用の省略

近紫外線カットフィルムを使用したハウスで誘殺時期の遅延効果が認められたことから、定植時の殺虫剤施用の省略が可能であるか検討した。

定植は4月上旬～中旬に行い、慣行区では定植時に殺虫剤（アヅマイマ-1粒剤）を施用し、UVカット区では粒剤無施用で、アザミウマ類、アブラムシ類の誘殺状況、寄生状況について調査した。

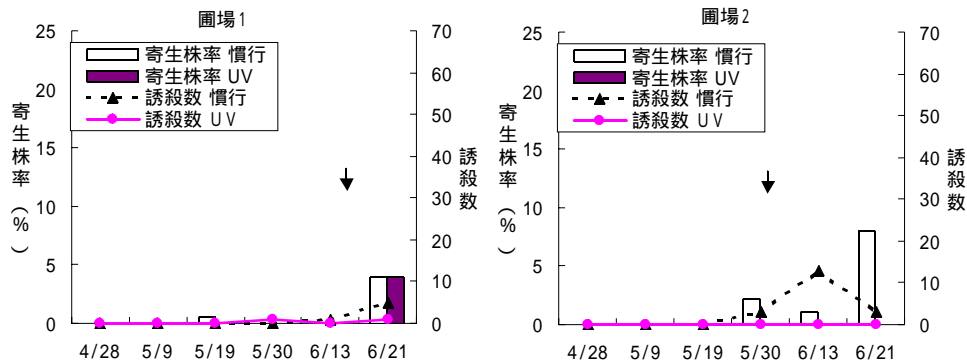


図3 アザミウマ類誘殺消長と寄生状況(H17) (: 茎葉散布)

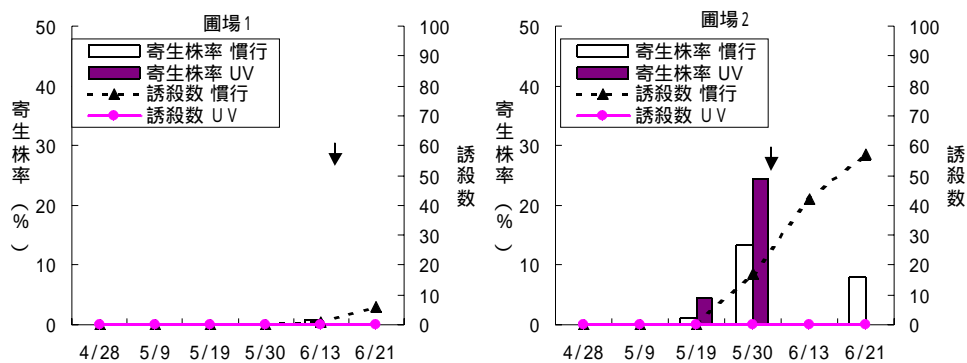


図4 アブラムシ類誘殺消長と寄生状況(H17) (: 茎葉散布)

誘殺状況

慣行区ではアザミウマ類及びアブラムシ類の誘殺が5月下旬から認められたのに対して、UVカット区ではほとんど誘殺されなかった。(図3, 4)

寄生状況

アザミウマ類は、慣行区では5月中～下旬に発生が認められたのに対して、UVカット区では発生が認められなかった。アブラムシ類は、圃場1では両区とも5月下旬まで発生が認められなかった。圃場2では両区とも5月中旬に発生が認められたため防除が実施された。防除実施以降は、慣行区で6月下旬に再び発生したのに対して、UVカット区では発生が認められなかった(図3, 4)。

以上の結果から、4月上～中旬定植の近紫外線カットフィルムを使用した施設ピーマンでは、慣行の殺虫剤施用と同等の害虫密度抑制効果が認められ、定植時の殺虫剤施用が不要であった。

3. 留意事項

- (1) 育苗時の害虫の発生等により、定植時にすでに害虫の発生が認められる場合や、飛び込みが認められた場合は、近紫外線カットフィルムによる増殖抑制効果は期待できないので防除を実施する。
- (2) 近紫外線カットフィルムを使用したハウスでは、栽培期間中を通してアザミウマ類、アブラムシ類の飛来数が少ないことから、両害虫を対象とした防除回数を減らせる可能性がある。
- (3) 灰色かび病、斑点病などの病害については、本現地実証では十分な防除効果は認められなかった。